

我々は、我々に指示されてゐる出來事をその丁度適當な所へ置けばいゝのである。

こゝで直ぐに次の様にいへる。何人も、印度ギリシア風佛像の發生を極めて古く溯らうとするものはなく、而して、——かのメナンドル王時までには、非常に引着けられたのではあるが——之にすら溯らうとしないのである。此の王は印度の聖典でも知られ、又、王の貨幣には、古い佛教の象徴が多い事も注意せられてゐる。印度で、萬事が、そんなに急に進んだとは思へないので、侵入者と被侵入者が、相互の偏見を棄て、終に一緒になつて、一の新しい圖像様式、即ち、僧形神を求める事になつた決定的談合を見るまでには、幾世代かを經たものとしなければならぬ。他方に於ては、何人も、之が、月氏國王迦膩色迦の貨幣に始めて現はれた時まで、此の様式が生れた年代を遅らせるのが優つてゐると信ずる者はないのである。勿論、迦膩色迦は、佛教の宗教と共に美術の傳播に大に力を致した人であり、阿育王は印度を彼に委ね、又中央アジア及び極東の道を彼に拓かしめたのであるが、元來一蠻族に